

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展 ある画家の軌跡」

20～30歳代の前衛的な作品、戦後郷里で描かれた自己の心境、境遇を託したかのような動物たちの姿、そして70歳代からのアジアを舞台にした新たな展開を見せる作品。その時々的小川原の視点を示す代表作の数々により、70年に及ぶ一人の画家の歩みを辿ります。

会期：開催中～12月11日（日）

■企画展示

「杉山留美子展 光満ちるとき」

作家自ら私的曼荼羅と呼ぶ幾何学的な抽象表現の時代を経て、色彩・光の表現の追求へ。赤、青などの鮮やかな色彩は次第に純度を増し、最終的にはまばゆい朝の光を感じさせるような、静謐な空間に到達しました。杉山留美子の「光の絵画」の世界をお楽しみください。

会期：開催中～12月11日（日）

アート・イベントのお知らせ

■ミュージアム・コンサート

「ファゴットだらけ」演奏会～名曲を柔らかな響きに乗せて～

出演：「ファゴットだらけ」（岡田恵美さん、八木聡子さん、前川公美夫さん）

日時：11月26日（土）14時～15時

会場：当館ロビー（無料）

既に16世紀には使われていた伝統あるファゴット、別名バスーン。深く響き渡る低音から甘いメロディまで自由自在に奏でるアンサンブルの魅惑的な音色をお楽しみください。

■土曜サロン

「ミュージアム・シネマ『ポロック～二人だけのアトリエ』（アメリカ・2000年・123分）」

日時：11月5日（土）14時～16時10分

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

「小川原脩のスケッチブック」

日時：11月19日（土）14時～15時

お話し：沼田絵美（当館学芸員） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

その他お知らせ

小川原脩記念美術館開館記念日＜無料開放＞

11月3日（木・祝）9時～17時（入館は16時30分まで）

第9回「ふるさとを描こう」入賞者発表

今年は、管内15校の小学校から72点の応募作品がありました。各学年から3点、全18点を「ふるさと賞」入賞作品として選考しました。俱知安町内の小学校からの入賞者と学校賞は次のとおりです。

*ふるさと賞／荒木 柁（東小1年）

芦田一瑚（東小2年）

北川ゆり（俱知安小3年）

三田彩葉（北陽小3年）

小野耀大（俱知安小3年）

川本悠月（北陽小4年）

辻 裕輝（北陽小5年）

渡辺鉄兵（俱知安小6年）

板倉隆一郎（俱知安小6年）

千石小桜（北陽小6年）

*学校賞／俱知安小学校、北陽小学校

◎ふるさと賞入賞作品は11月3日～11月13日まで小川原脩記念美術館で展示します

◎応募された全作品は11月15日～12月11日まで文化福祉センターで展示します



小川原脩記念美術館 俱知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分まで）

11月の休館日

1日、8日、15日、22日、29日

美術館から

杉山留美子さんが、小川原脩とともにインド北東部のラダックへ旅立ったのは、今から30年以上前の1983年。片や41歳、片や72歳。親子ほども年は違いますが、ともに自分の表現世界をとことん追い求めるタイプでした。ラダックを訪ねた頃、小川原は人と動物と自然が混然一体となって織りなす世界へ、そして杉山さんは、この世に降り注ぐ光の描出へと足を踏み入れていました。チベット文化が色濃く残るラダックには、それぞれが求める表現への手掛かりがあったのでしょうか。小川原は形にこだわり、杉山さんは純粹な抽象。画風は全く異質ですが、もしかしたら、二人は同じ世界を別な方向から見ていただけたかもしれません。

館長 柴 勤

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

つむぎ

感動一点 の場

『雪の中の馬』

1973年 小川原 脩 画



「馬の絵」というとき、多くの人は馬のからだ全体を横から見た姿をイメージすると思う。しかし、小川原脩の描く馬は、向きも形もさまざまである。正面を向いた、顔だけ。横を向いた、顔だけ。さらにはずんぐりとした胴体がほとんどで、顔は逆さま。「これは『カバ』ですよ」と問われることもしばしばである。この作品も、赤茶色の大きなかたまりとして、馬の体を中心に、後姿が描かれている。林の中、脚が埋まるほどの雪で行くことも戻ることもできずに、耳を伏せ視線を向ける一頭の馬の姿だ。小川原脩が描く馬はサラブレッドではない。そのほとんどは農耕馬である。ここ倶知安でも、かつては人と共に暮らし、プラウを曳き、農業の主戦力として活躍していた。それも1950年代の終わり頃にはすっかり機械に置き換わった。日常で馬を間近に見ることも無くなった今、小川原の描く馬の肉感だけが真に迫ってくる。絵の具の掠れたところからは、下に重なった色が見え隠れする。強い風が吹きつけ舞い上がる雪とその合間から見える木立の光景が、実感をもって目の前に再現される。冬の風音が聞こえるようだ。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）

ふる探訪 さと

—温泉だいすき—

404回

ほんの先日まで暑かった日が続いたような印象があるのだが、すでに羊蹄山の山頂が白くなってしまった。周囲の山々もいまや紅葉と落葉の真っ最中である。

寒くなるとストーブ、鍋料理そして温泉など、暖かいものが恋しくなる。気持ち少しでも暖まることを期待し、温泉に生活の全てを託している昆虫についてお伝えしよう。

五色温泉の泉源に行くと、湧き出した温泉水が硫黄の黄色い色を引いて流れている。温泉水の流れる岸边にたくさんの昆虫がいる。大きさはほんの3ミリほどで、近づくと飛んで逃げるが、すぐに近くの地上に静止する。目立たない灰褐色なので、まるでワラワラとゴマを散らしたみたいに見える。余りにも小さいのでほとんどの人は気がつかないのだが、その数はかなり多い。

この小さな虫はハエの仲間で、その名もオンセンバエという。その名のとおり、幼虫は温泉水の中で増殖する藻類を食べて成長してサナギになり、成虫も温泉水のすぐそばにとどまって生活している。一見、ひ弱で飛ぶ力も弱そうに見えるけれど、日本列島はおろか、ユーラシア大陸から北アメリカにまで広く分布する。ただし、どこにでもいるのではなくて温泉地に飛び飛びに生息する。このハエほど温泉と強く結びついた生活を送る虫は他に知られていない。

野趣あふれる露天風呂に行かれたら、ぜひ湯船の周りに注意を向けて欲しい。ゴマ粒ほどのこのハエがいるかも知れない。ハエの仲間ではあるが、いわゆる汚物とは関係がないので、くれぐれもご安心を。

文：岡崎 毅（倶知安風土館館長）



▲オンセンバエ

風土館講座のお知らせ

「くっちゃんアーカイブ」についての講座（講師：新谷保人さん 京極町湧学館副館長）の第1回目が10月16日（日）に開催され、アーカイブの維持には資料の所有権と著作権が重点であること、所有者とは別人が所有者の了解の上でデジタルデータをWEB上で公開し、さらにそれを公的機関が後押しすることで公的なアーカイブの設置につながった実例などが紹介されました。

次日は11月5日（土）の午後3時からです。内容は「倶知安を扱った文学作品や倶知安出身の作家を通してわが町を眺めることをデジタルで行うとどうなるか」です。ぜひご来聴ください。